

のびのび乃木っ子

乃木小学校特別支援教育部だより
令和5年7月18日

1年生の平仮名学習

子どもは、どのようにして「字を読む（書く）」ことができるようになるのでしょうか？

保護者の皆様は、自分がどのようにして文字を獲得していったのか、幼いころの記憶がおありでしょうか？

小学校入学後、「鉛筆の持ち方」に始まり、「いろいろな線をなぞる」「教科書の絵を見ながらお話をする」「『とんとんとん』などの音のフレーズと文字に親しむ」などと、ゆっくり丁寧に文字や書字と向き合ってきた1学期。4か月経った今では、平仮名のほぼすべての文字を学び終えました。そして、いわゆる「テスト」に対しても、先生や友達と一緒に指で追いながら問題を読み、考えて、文字や丸を書くことで「解答」しています。「ねこ」と「ねっこ」の違いや、「わたしは」「がっこうへ」というような助詞の書き方や決まりも覚えているところです。

この「学び始め」の時期に合わせ、「平仮名をどのくらい速く正確に読めるか」を全員調べてみました。それが「平仮名アセスメント」です。これは平成29年から松江市内の1年生全員が行っているもので、必要な児童には夏休み中に家庭でカードによる読みの時間を取ってもらうことや、学校で「言葉を育む」「体を育てる」ことを教師が仕組んでいくことも含んだ取組です。

さて、ここで再度「文字を読み書きする」ために必要な力について押さえていきましょう。

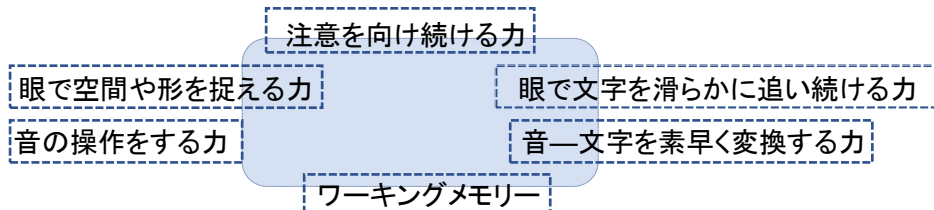
【文字を読む】

- ①眼で見た形を文字だと認識する
- ②その文字を「音」と結び付ける
- ③ひと文字だけでなく、文字のつながりを「単語」として認識し、理解する

【文字を書く】

- ①耳から入った音、あるいは自分の頭の中にある音やイメージを文字に変換する
- ②形を正確に思い出す
- ③指に「書く」という指令を出して字を書く

そのために必要な認知機能としては



などがあります。

ここで、「音の操作をする力≡音韻認識」について少々説明します。

これは、言葉の意味ではなく音の側面に注目し、すばやく認識したり操作したりする力のことです。幼児期だと「しりとり」をしたり、名前をさかさまに言ったりするなどの、言葉（音）の遊びの中で身についてくる力です。



読み書きが苦手な子どもの中に、この「音韻認識」の力が弱い子は少なくありません。

また、聞く力のつまずきとして、「パ」と「バ」とか「ね」と「れ」など似た音を聞き取りの中で区別しにくいなどの様子も見られることがあります。

他にも、眼で文字を追いつける力も必要です。そして、これらの力を支えていくのが「注意を向け続ける力」や「ワーキングメモリー」です。

さらに、「言葉を知っている」ことも読み書きには欠かせません。言葉を見たり聞いたりしながら即座に意味をイメージできるからこそ文字に変換でき、逆に文字を読んだ時に理解や思考へとつなげることができます。

1年生は今、これらの認知機能をフル稼働させながら平仮名習得を頑張っています。「読めるって、言葉って、楽しいな！」と感じながらこの先の学習が続けられるよう、夏休み中も文字や言葉でいっぱい遊んでいただければと思います。

読み書きにつまずくと

それでも、学年が上がっても片仮名や漢字を交えた文章がすらすらと書きにくかったり、アルファベットの読み書きに苦戦したりする子どもは必ずいます。

気になるのは、低学年期にあれほど「わかっていくって楽しい」と思っていたはずなのに、だんだんと「自分にはできない」と自信を失ってしまう子どもの多さです。読み書きだけのことではなく、学習全般に対してそうになってしまうのです。いつも遅れる、頑張っても間違いを指摘されたり、もっときれいに書いてと言われてたりする、正解がわからないまま授業が終わっていく…こんな日々を繰り返していくと、無力感が強くなるのでしょうか。

学習で大切なのは、きれいに正しく書くこともですが、「理解できている」「理解しようと精いっぱい頭を使おうとしている」ことだと思います。自信をなくす前にその子に合う方法を考えていき、頑張っていることを確かめていきたいものです。

(文責：吉野晃子)

【参考資料】

- ・「思春期青年期の読み書き障がいの特性について」2022 竹田契一
- ・「特別支援教育ガイドブック 読める！書ける！～すべての子どもが楽に読み書きを学ぶために～」平成23年 京都府総合教育センター